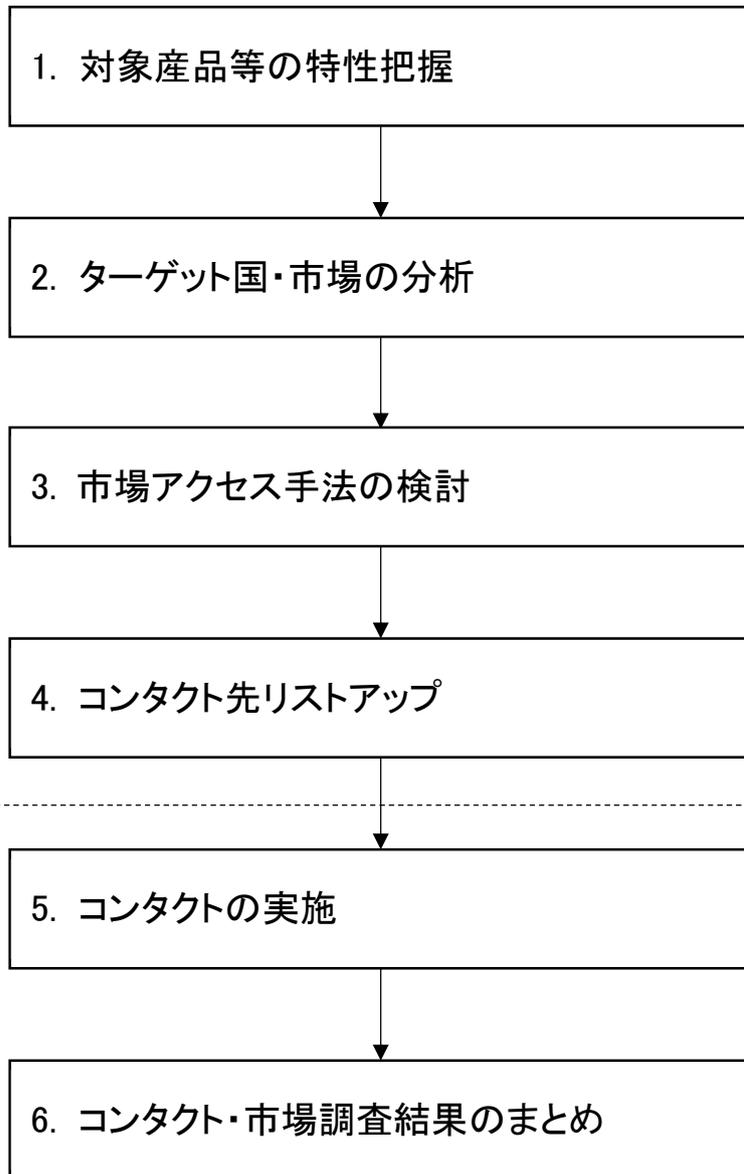


生糸に関する欧州市場
ニーズ・販売チャンネル
調査レポート

合同会社 JEXPO

業務フロー



1. 対象産品等の特性把握

本業務の対象産品である生糸ならびに事業者について、欧州市場の市場獲得を目指す観点から、その特性を概括すると以下のとおりである。

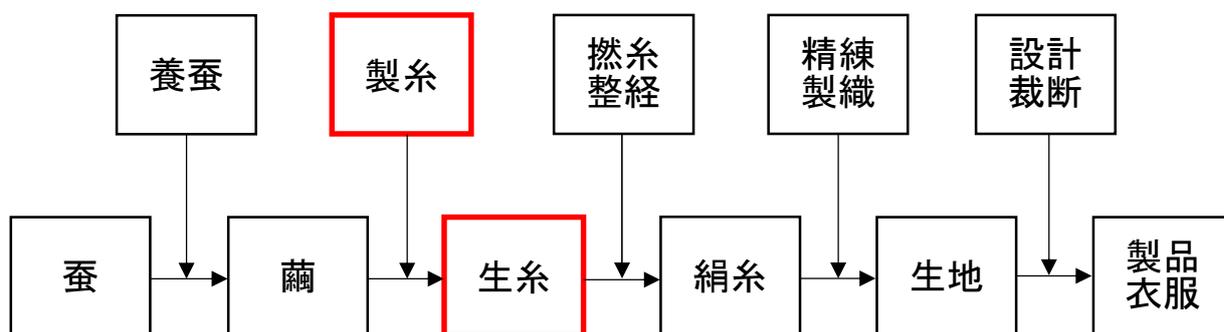
産地現地ヒアリング：9月15日

項目		内容
産品	名称	生糸
	取引対象	生糸(一次加工)
	訴求ポイント	<u>高い細繊度</u> → 絹糸の美しい光沢 ・通常生糸 21 デニールに 7 本 ・対象生糸 21 デニールに 10 本(約 1.4 倍) <u>多条繰糸・低速巻取</u> ・嵩高 通常生糸の 1.5 倍(軽さ 67%) <u>低温無理な煮繭の回避</u> ・タンパク質変性を防止 → 白度の高い色味
	供給可能量	xxx kg/年
	最小ロット	xxx g
	サンプル提供可能量	xxxxセット
	希望取引価格	xxxxxxx JPY / 1 繰(180g)
	事業者	海外取引経験
	外国語ホームページ	なし
	外国語対応	不可
	営業資料	なし

1-1. 産品

1) 取引対象

蚕の繭から完成品(シルク製衣服等)になるまでには、ひじょうに多くの工程があり、同時に多くの事業者が関与する。このうち、本事業の対象事業者が行っているのは、蚕の繭糸の一次加工である「製糸」である。そして製糸した結果、本事業の対象産品である「生糸」が生産される。こして、この生糸が、取引対象物である。生糸は、いわば「素材」であり、生糸のままでは、製品(完成品)として市場に流通することはない。主要工程を概略で示すと、下記のとおりである。



生糸: 繭からとった1本1本の糸を10本束ねたもの

撚糸: 2本以上の生糸同士を撚ること(おもに緯糸に使用)

整経: 経糸に使用するため、経糸同士を束ねるなどして揃えること

絹糸: (本報告書では、撚糸・整経を終え、生地になる前の糸のことを絹糸と呼ぶ)

精練: 石鹼液などで絹糸からセリシンなどの不純物を除去すること

製織: 経糸と緯糸を織機で織ること

生地: 絹糸を経糸・緯糸にして織ったもの

「シルクのような肌触り」といった表現で知られるシルクたる繊細さ、優美さは、実は、上記の「精練」のあと、ようやく現れる。言い換えると、出荷時の生糸は、「ごわごわ」とした質感のままである。これは、対象生糸に限らず、すべての生糸に共通する。このため、生糸だけを見て、どのような衣服に仕上がるクオリティをもっているかを目利きできる人材は、ほぼいない。事業者によれば、世界じゅう探してもほぼ見当たらないだろうとのこと。つまり、生糸の現物を見たり触ったりしただけでは、ほかの生糸とは、まず見分けがつかない。

なお、博物館自身は、絹糸・生地および製品を製造・加工するための施設や技術を保有していない。また、国内シルク関連事業が衰退するなか、絹糸・生地の製造を外注できる国内事業者もいない。つまり国内で、絹糸や生地に仕上げることは、不可能である。

2) 訴求ポイント

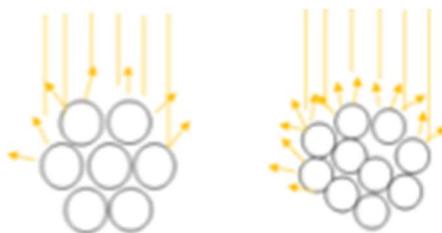
高い細繊度と美しい光沢

繭からとれる繭糸は、想像を絶するほど細い。繭糸の単位長さ当たりの重さは、9000m 当たりの繭糸の重さ(単位デニール:D)で比較する。一般的な繭糸が約3デニール(9000m が3グラム)であるのに対し、対象生糸は、さらに細く軽い約2.0~2.2 デニール(9000m が2.0~2.2 グラム)である。このことを「細繊度が高い」という。

多くの養蚕地では、生糸の収穫量を増やすため、太い糸を吐く蚕(=デニール値を大きくする蚕)の品種改良を行ってきた。一方の本地域では、糸の品質にこだわり、吐く糸が細い蚕の品種(改良あけぼの)を採用している。これが対象生糸の細繊度が高いおおきな要因である。

ところで、繭糸は、そのままではあまりに細いため、繭糸同士を束ねて太くする作業を行う。これが「製糸」である。ここで、シルク業界で流通する生糸は、世界じゅうで規格が標準化されている。代表的なものは、21、27、31デニールである。対象生糸は、約2デニールなので、繭糸を10本束ねて21デニールの生糸にする。21デニールで、ようやく髪の毛の太さの約半分になる。一方、一般的な生糸は、約3デニールなので、繭糸を7本束ねて21デニールの生糸にする。

光学的には、表面反射が複雑であればあるほど、美しい光沢が生まれると言われる。シルクの光沢が美しいのも、同じ原理とされている。つまり、対象生糸は、同じデニール値のほかの生糸と比べて、約1.4倍の糸数がある分、表面反射が複雑になる。これが、対象生糸が「白い椿」と称されるほど光沢が美しい理由のひとつとされている。



通常の生糸(7本で21デニール) 対象生糸(10本で21デニール)

多条繰糸・低速巻取

繭とは、蚕の幼虫が1本の糸を吐き続けて作ったものである。すなわち、繭の外周のどこかに、その始点である「糸口」がある。前述の「製糸」とは、具体的には、1つ1つの繭の「糸口」を見つけ、さらにその10個分を束にしてまとめる作業である。この作業を特に「繰糸」と呼ぶ。

本地域で行われている「多条繰糸」とは、「糸口」を肉眼でひとつひとつ見つけ、見つけ次第、人間の手で繰糸機に「給繭」する方法である。そして10本の繭糸を束ねて製糸する。このため、多条繰糸機の巻取回転速度は、人間の作業能力にあわせて100～120回転/分と低速に抑えられている。



一方、現代主流となっている自動繰糸機には、繊度感知器と自動給繭装置が備わり、繰糸が自動化されている。この結果、繰糸速度は、多条繰糸の3倍以上である。

反面、自動繰糸は、繭糸を高速で巻き取るために無理な力をかけ、糸を強く引っ張ってしまう。他方、多条繰糸の場合は、無理な力をかけないため、柔らかいままの糸ができる。この結果、嵩高(同じ重さで比較した場合のボリュームが通常生糸の約1.5倍、軽さで比較すると67%)で軽量感のある生糸に仕上がる。



通常生糸

対象生糸

同じ重さで比較した場合のボリュームが通常生糸の約1.5倍(嵩高)

低温乾燥・無理な煮繭の回避

ほとんどの生糸産地では、大量の繭を短時間で殺蛹・乾燥するために高温での熱風乾燥が行われる。しかし一方では、高温の影響で、繭糸に含まれるタンパク質が変性したり、変色したりする。

一方の対象生糸は、生の繭の状態を極力維持するため、低温乾燥方式を採用している。これにより、無理な煮繭を避けることができ、「白い椿」と称されるほど白度の高い色味のない生糸に仕上げることができる。



3) 供給可能量

対象生糸の供給可能量(総生産量のうち、取引先が未定のもの)は、約xxxkg である。これは、1回の取引量が1トンを超えることが、特段珍しくない世界の生糸貿易事情に照らせば、かなり小さい。仮に、ディストリビューターが供給可能量全量を成約させ、手数料として取引価格の 50%分の利益を得たとしても、その額はxxx万円にとどまる。世界の生糸産業における取引額が、輸出ベースで約 449 百万ドル(2018 年)であることと比べると、ディストリビューターにとって、魅力的な商材であるとは言い難い。

くわえて、ヒアリングによれば、仮に供給可能量全量の実績が取引が成立し、さらに次年度以降も、取引量の増大が見込めるような状況になったとしても、設備を増強したり人員を増員したりして、増産するのは現実的にはできない、とのこと。このような状況からも、ディストリビューターなどを介在させた販路を構築するのは、ほぼ不可能であろうと判断する。

4) 最小ロット

対象生糸の海外向け取引の最小ロットは、xxxxg と設定した。これは、生糸 180 グラム分をひとつくりにしたもの(1総:かせ)の12総分に相当する。

5) サンプル提供可能量

対象生糸の海外向けの市場調査や取引先獲得のための営業資料として、下記写真の無料サンプルを xxx セット用意することとした。

なお前述のとおり、サンプルの受取人は、生糸(Raw silk)だけでは完成品の質感を感じることができないことから、参考として絹糸(Silk)を添えることとした。



RawSilk

種類	重さ(g)
21d	0.525
27d	0.675
31d	0.775

Silk

種類	重さ(g)
21d×12 252d	0.28
31d×15 465d	0.36

6) 取引希望価格

対象生糸の取引希望価格は、xxxxx JPY / 1総(180g)とした。なお、この価格は、世界でも著しく高価といわれる国産生糸(約 4,000~5,000 JPY / 1総)のさらに、xxx 倍の価格である。

1-2. 事業者

1) 海外取引経験

なし

2) 外国語ホームページ

なし

なお、日本語ホームページがあるものの、コンテンツなどはきわめて限られている。その認知度は高いとはいえ、アクセス・HPからの問合せ等は、ほとんどない状況である。

3) 外国語対応

英語等で対応できる担当者はいないとのこと。

4) 営業資料

実質的には、既存の国内顧客からの発注を継続して受けるのみに留まっている。国内においても、新規の販路開拓等が行えていない。したがって、販促資料はわずかにあるものの、価格表、見積書・契約書のひながたなど、商談・成約に必要な資料がまったく準備されていない。



事業者施設の外観

以上をふまえると、現状のままでは、仮に海外の見込客が現れたとしても、その相手とネゴシエーションしたりしながら商談を進め、成約に結びつけるまでの手段と交渉スキルがない。したがって、そのような交渉を必要としないよう、取引条件がきわめて明確な案件をピンポイントで発掘する必要がある。つまり、いわゆる「御膳立て」が必要であり、この点においては、成約を実現させるまでのハードルはひじょうに高い。

2. ターゲット国・市場の分析

シルクを含むテキスタイル商材の完成品の流通は、すでにじゅうぶんグローバル化されている。したがって、本事業の対象国の選定にあたっては、対象生糸を使った製品に対するニーズが高い最終消費者がどこの国にいるか、といったマーケティング視点からの分析は、ほぼ必要ない。

むしろ重要なのは、かつて欧州では、養蚕や生糸生産がひじょうにさかんであったが、現在は、ほとんど行われていない現状を直視することである。そのうえで、欧州では、現在、どの国が生糸を輸入し、その後、いったいどのようにして絹糸・生地加工し、そして最終的に製品化しているかを分析することが重要であるといえる。

本業務では、以上のような観点にたち、対象国の選定を行う。

2-1. 世界の国別生糸生産量

生糸の国別生産量は、以下の通りである。世界の生糸生産高の約 82%は、中国が占めている(出展:Global Silk Industry)。

Country	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
Bangladesh	40	38	42.50	43	44.5	44	44
Brazil	770	558	614	550	560	600	650
Bulgaria	9.4	6	8.5	8.5	8	8	9
China	115000	104000	126000	130000	146000	170000	158400
Colombia	0.6	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	0
Egypt	0.3	0.7	0.7	0.7	0.82	0.83	1.2
India	21005	23060	23679	26480	28708	28523	30348
Indonesia	20	29	20	16	10	8	4
Iran	75	120	123	123	110	120	125
Japan	54	42	30	30	30	30	32
North Korea	-	300	300	300	320	150	365
South Korea	3	3	1.5	1.6	1.2	1	1
Philippines	1	1	0.89	1	1.1	1.2	182
Syria	0.6	0.5	0.5	0.7	0.5	0.3	0.25
Thailand	655	655	655	680	692	698	712
Tunisia	0.12	3	3.95	4	4	3	2
Turkey	18	22	22	25	32	30	32
Uzbekistan	940	940	940	980	1100	1200	1256
Vietnam	550	500	450	475	420	450	523
Madagascar	16	16	18	18	15	5	6
Total	139100.02	129661.80	152845.64	159737.10	178057.62	202072.83	192692.45

Source: Global Silk Industry .Statistics International Sericultural Commission 2016. <http://inserco.org/en/statistics>

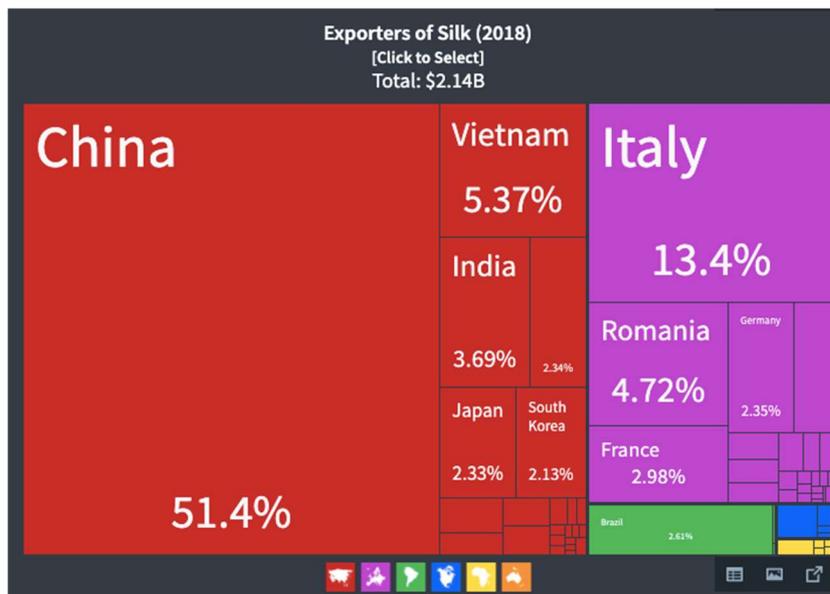
[15]

2-2. 世界のシルク貿易

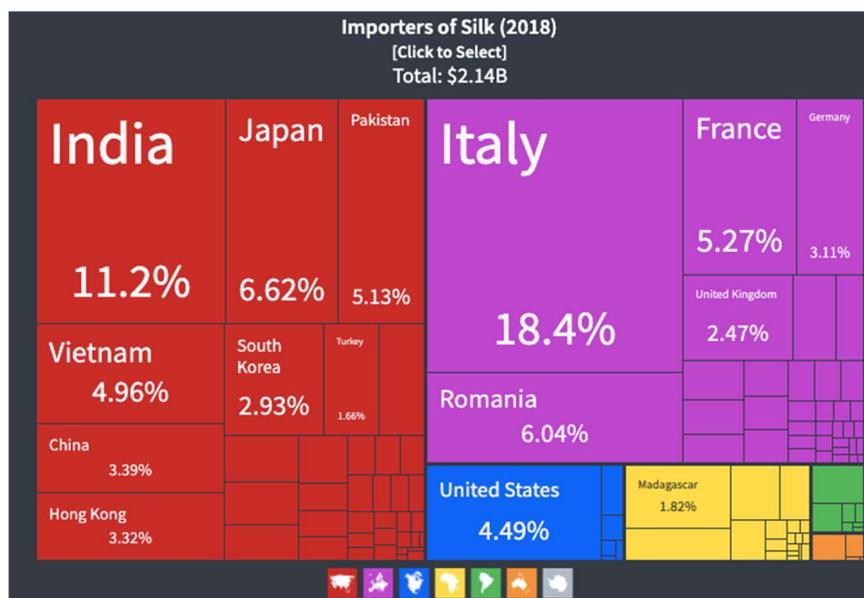
欧州における生糸市場に先立ち、まず世界におけるシルク貿易取引を概括する。

The Observatory of Economic Complexity (OEC)によれば、2018年における世界のシルクの貿易額は、21.4億USドル(約2230億円)である。

輸出額を国別に見ると、圧倒的トップは中国であり、世界取引額の過半数以上の51.4%を占める。これに、イタリア、ベトナム、ルーマニア、インド、フランス、日本が続いている。



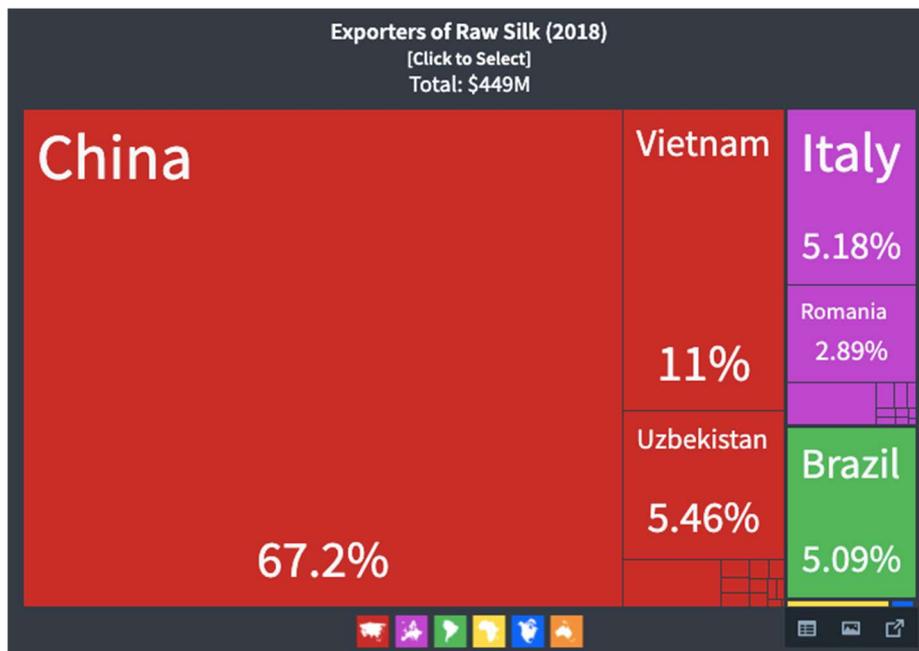
一方、国別輸入額を見ると、イタリアがトップであり、これに、インド、日本、フランスが続いている。



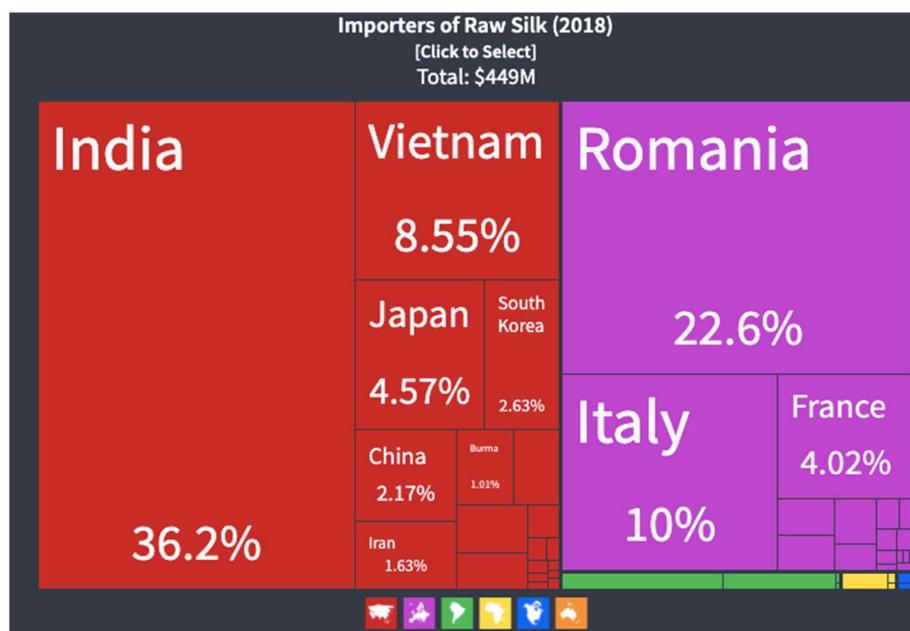
2-3. 世界の生糸貿易

続いて、世界の生糸の貿易取引額をみる。

世界の生糸の貿易額は、4.49 億 USドル(約 467 億円)である。圧倒的トップは中国であり、世界取引額の 67.2%を占める。これに、ベトナム、ウズベキスタン、イタリア、ルーマニアが続いている。



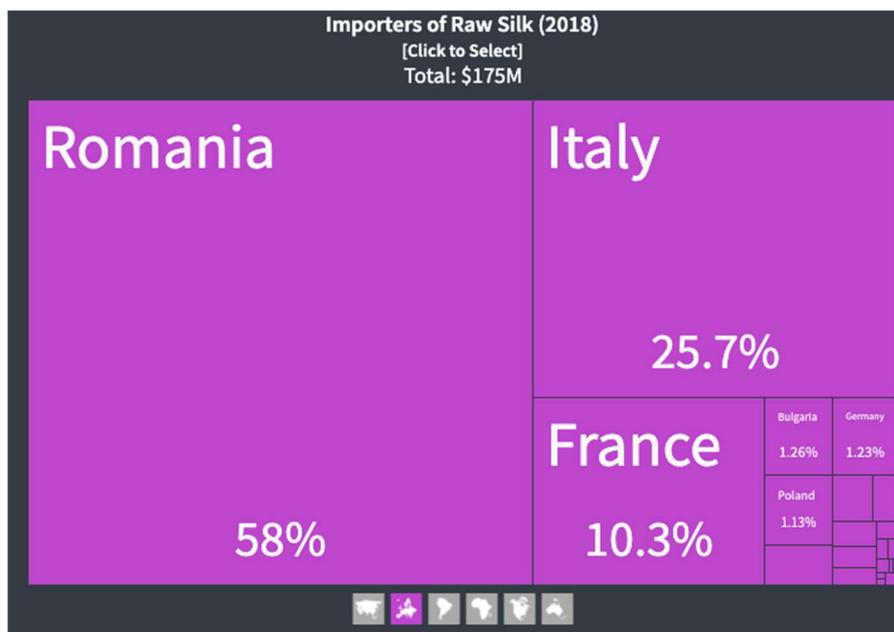
一方、国別の輸入額を見ると、インドがトップであり、これに、ルーマニア、ベトナム、イタリア、フランス、日本が続いている。



2-4. 欧州の生糸貿易

さらに、ヨーロッパにおける生糸の貿易取引額をみる。

輸入額がもっとも多い国はルーマニアであり、これにイタリア、フランスが続いている。



2-5. 対象国の選定

これらと各種文献調査より、世界および欧州における、シルクおよび生糸についての貿易取引について、以下のトレンドが読み取れる。

世界における生地の貿易額は約 2230 億円と、生糸の貿易額 467 億円を大きく上回っている。世界に流通しているのは、まず生地であり、素材としての生糸は、その一部に過ぎない。

そして、世界に生糸を供給し、席卷しているのは、中国である。市場における販売価格の決定にも大きな影響力をもっている。そして中国は、生糸だけでなく、より付加価値のあるシルク生地の生産までを中国国内で行い、それを世界中に輸出している。つまり、中国は、養蚕から、生糸・絹糸そして生地まで、一貫して生産できる体制を充実させ、生糸のみならず生地までの市場を席卷している。

一方、欧州諸国では、生糸から絹糸・生地を生産する設備・技術・人材が、ほぼ現存していない。そのため、生地を中国等から輸入し、それを使ってデザイン・裁断・加工等を行い、衣服等最終製品に仕上げるプロセスがメインとなっている。そして、そのほとんどは、欧州諸国が中国等に生地の品質等を指定して生産させたものを輸入していると予想される。

今回対象国として想定するイタリア、フランス、イギリス、スイスのうち、このような取組に注力している国は、イタリアとフランスの2国であるといえる。

このうち、イタリアは、前述のとおり蚕から自国生産化する動きがあり、日本からの新規参入は難しくなる可能性が高い。

一方のフランスは、諸外国から生糸を輸入し、それを最終製品に仕上げる基本スタンスは当面変わらないと予想する。また、フランスは、matériauthèque(新しい素材を収集・発掘し、企業やデザイナー等に提案する職業)、prescripteur(新しい素材の新たな活用方法を自ら発想・デザインする職業)などの専門職が確立している。

イタリア・フランス両国ともに、自国で絹糸および生地を生産できる体制がほぼ現存していない状況であることは同様である。このような条件を踏まえれば、matériauthèque、prescripteur などの専門職を通して、生糸の販路を見つけていくことが、ひとつの手法として考えられる。



matériauthèque、prescripteur の事務所例

以上をふまえ、本業務では、フランスを対象国とする。

3. 市場アクセス手法の検討

WEB での概査によれば、化学繊維等とは異なり、欧州内で生糸から絹布を専業・定常的に製造している工場等は、ほぼ現存していないと推察します。絹布は、中国・インドなどの生糸産地が製品に仕上げたうえで、それを欧州へ輸入するチャンネルが本流と思われます(下図①)。

その一方で、一部には、ハイブランド等に対して絹布のデザイン提案を行う欧州企業が、絹布のデザインまでを行い、絹布の製造は、中国・インドなどの絹布メーカーに委託、そして出来上がった絹布をハイブランドに納品するチャンネルがあると想定します(下図②)。

また、さらに小規模・零細・少数ながら、絹布製造にも対応できる欧州の繊維メーカーが、自社で絹布をデザイン・製造し、それをハイブランドへ納品するチャンネルが一部にあると推察します(下図③)。

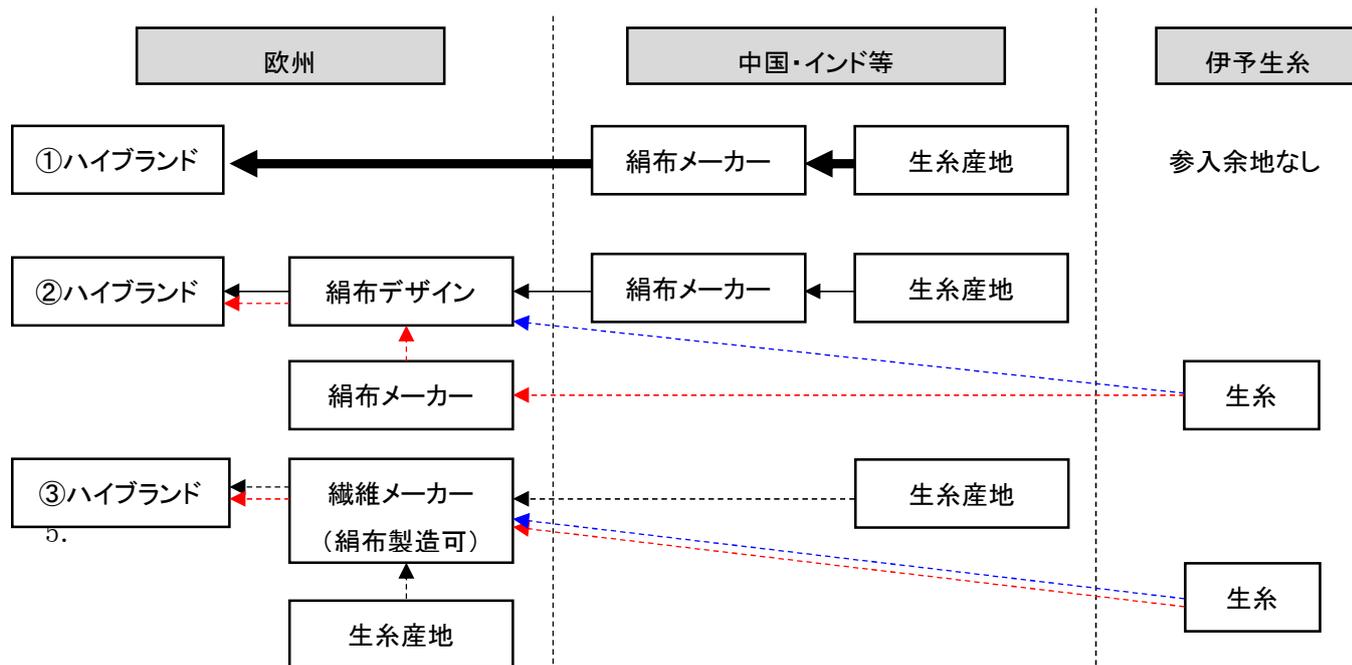
伊予生糸は、国内で絹布を製造することができません。この点を鑑みれば、ハイブランドへのコンタクト先(青ライン)および納品チャンネル(赤ライン)は、おもに以下の2タイプがメインと推察します。そして、それはごく一部に限られており、その発掘はたいへん厳しいと予想してします。

絹布デザイン会社

- ・デザイン性の高い絹布をデザインできること
- ・現取引先以外の絹布メーカーへ絹布を製造委託するルートをもっていること
- ・ハイブランドへ提案するパイプをもつこと

繊維メーカー

- ・繊維メーカーでありながら、デザイン性の高い絹布を自社でデザインできること
- ・現取引先の生糸産地以外から生糸を仕入れて支障がないこと
- ・ハイブランドへ提案するパイプをもつこと



生糸・絹布の納品チャンネルと対象生糸参入の可能性

4. コンタクト先リストアップ

- ・オートクチュールのデザイン担当者 1,919 名
- ・服飾縫製者 5,111 名
- ・テキスタイルの輸出入業者 178 事業者
- ・モードのアトリエなど 582 名
- ・服飾製造・卸 2,827 名

(以下 部外秘)

日本産生糸の取引先を探しています

細織度

21 デニールに 10 本の繭糸

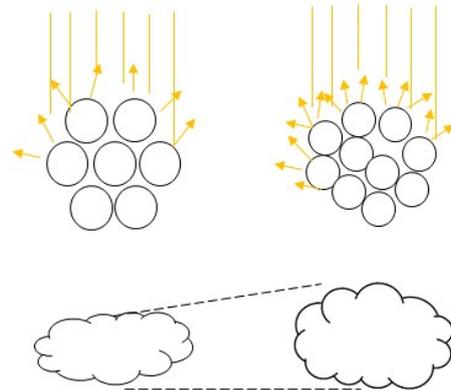
- ・ 絹糸の光沢は、表面反射の複雑さ
- ・ 糸強度

多条線糸・低速巻取

- ・ 嵩高 1.5 倍 (軽さ 67%)

低温乾燥

- ・ 無理な煮繭を避けた繭糸タンパク質の変性を防止
- ・ 白度の高い色味を確保



希望取引相手

- ・ 高級ブランド等への提案力をもつ
- ・ 富裕層個人客をもつ
- ・ 古い生地 of 修復を行っている

取引条件

- ・ 21D (20/22) 27D(26/28)
- ・ 年間供給可能量 限定 xxx kg
- ・ 最小ロット xxxx g

無料サンプル

わたしたちは生産者です。下記ができる方に限り先着 50 名に無料サンプルを発送します。

撚糸・整経・精練・織

生産者

農水省 GI 取得



プロモーター

合同会社 JEXPO info@jexpo.org

サンプル・価格・注文の問合せ

- ・ 2 月渡仏商談 OK
- ・ Zoom コンタクト OK

<https://fr.jexpo.org>